



大波小波

第I卷・1933-42

東京新聞出版局

大波小波

匿名批評にみる昭和文学史——1

昭和五十四年三月五日 第一刷発行
昭和五十四年四月十日 第二刷発行

編者 小田切進

発行者 真野義人

発行所 東京新聞出版局

東京都港区港南二ノ三ノ一三

中日新聞東京本社

振替口座(東京)五―五四九七

電話 〇三―四七一―二二二一(代表)

〇三―四七二―四四三四(直通)

印刷 猪瀬印刷株式会社
製本 白信製本有限公司

© 1979 THE TOKYO SHIMBUN

匿名批評の条件

中村光夫

『東京新聞』の「大波小波」は現在続けられている匿名批評のなかで、もっとも歴史の古いものでしょう。

これを最初から、文学を扱った文章を中心として刊行することは、いろいろな意味で興味ある企てです。

一九三三年（昭和八年）には我々はまだ大学生でした。やたらに文学が好きなだけで、文壇の裏表などは何も知らなかったのですが、それでも時事問題を、無遠慮に、生きた形で料理した短評には強い関心をそそられました。

『都新聞』は当時の新聞のなかで、もっとも文学的（あるいは文壇的）色彩の濃いもので、この匿名欄を読むことで、僕らは文壇の生きた消息に通じるように思いました。

昭和八年は、所謂文芸復興の年です。数年にわたって、ジャーナリズムを風靡したプロレタリア文学と新興芸術派が、それぞれ壁にぶつかり、作家は孤立した自分を顧みることと新たな針路を模索し始めた時代であり、同時にこのような個性の自覚と活動も罪悪視する軍国主義の圧迫

が、文学的活動自体を、やがて不可能にする事態を招来することになります。

このような嵐を前にした小康の時代に、危機を胸のうちに感じた文学者たちが、めいめい勝手な方角を向いて叫んでいる有様を、この匿名欄はほぼ忠実に伝えていきます。

加わってくる外圧に対抗するために、この欄の編集方針にもさまざまな工夫が見られ、作家論の特集などがしばしば試みられましたが、これは自発的にもものを言いたい気持が執筆者のあいだでいくぶん薄れてきたことを示すものかも知れません。

同時に、多数の論議に堪える生きた問題が文壇から消えかけたことを意味するので、この両者は考えて見れば同じ現象の二面かも知れません。

戦前の「大波小波」の十年間を通じて、軍部と情報局によって加えられた圧迫が次第にこの特色ある匿名評を萎縮させたのは認めなくてはならないでしょう。

名を匿してものを言うのは本来臆病者の仕事です。と言って悪ければ、匿名は批評のなかでもっとも遊戯的要素が強い仕事です。そこには顔をかくしてものを言う洒落気と、「公衆」の代表者をもって自任する正義感と、力を自負する相手を「術」で倒す熟練とが、潑刺と結合していることが必要で、さらに文学にたいする無償の、自己顕示欲をはなれた愛情があれば申し分ないのですが、その根本の魅力をなすのは、一度ごとに読み捨てられる文章を思い切った告白の場とする人眼につかぬ誠実です。

短評の文章に文学としての生命をあたえるのはこの半ば無意識の正直でしょう。

目 次

匿名批評の条件・中村光夫……………一

*

1933——昭和八年

疑惑・幻滅・裸——小穴隆一の「二つの絵」……………	三三
同志討ち観——好漢林、一寸待て……………	三三
逆コース礼讃——嘉村磯多をめぐる傾向に就て……………	三四
文士の失業——デモもストも出来ぬ悩み……………	三四
取急いでゐる——小林多喜二「地区の人々」……………	三五
文芸欄の諸型——どれも一つの行き方だ……………	三六
匿名批評小観——元來公明至上……………	三七
心細い自由主義の再燃——蚊の鳴く叫び……………	三六
抗議の権利——手近な京都の問題にも！……………	三六
大人の文学——潤一郎、盲人への執心……………	三〇
主人は持つな——志賀直哉は頭がいいぞ……………	三三
散漫な空気——自由同盟とは……………	三三
希望と事実——あわて者の実例二三……………	三三
百三血迷ふ——一群の不自由主義者達……………	三四
文芸消費組合の統出——旗を捲いた挨拶状……………	三五
青野と小林——いはゆる「私批評」を排撃する……………	三六
徳永直の横ッ飛び理論——太陽の無い作者……………	三七
対策の対策——文芸家協会よ、隋眠を覚ませ……………	三六

吳越同舟の真面目を——『文学界』への希望……………	三六〇
匿名無用の説——『遍飯面を脱いでは何うか』……………	三六〇
指導的な気魄なし——『文芸沈滞座談会』……………	三四〇
暴論に答ふ——『ケチな野心に進退は誤らぬ』……………	三四一
対立する指導精神——『源氏物語』の禁止……………	三四二
大人の小林——『もう一度子供に還れ!』……………	三四三
伏字の箇所——『三六年』の認識を判然させよ……………	三四四

1934——昭和九年

春夫よ、三省すべし——その「谷崎」論……………	三三九
ドグマと講釈——『リアリズムの検討』……………	三三九
愛国文学者と警保局長——『文芸院に就て』……………	三三九
巷ちまたに桜音頭——『流行歌と世相』……………	三三〇
『文学界』反省せよ!——『愛想づかし由來』……………	三三一
匿名評論時代——『大宅の暴露には猶ほ誤謬あり』……………	三三二
転向小説のハシリ——『村山知義の「白夜」』……………	三三三
幽霊時代——『太陽を失つたインテリ』……………	三三四
小林の告白——『自家撞着を何う清算するか』……………	三三五
さすが神様——『横光と大学生達』……………	三三五
肚修業は零——『読者を迷はしむる勿れ』……………	三三七
やぶれかぶれ芸術——『龍胆寺の問題作』……………	三三七
底を割った文芸復興——『新潮』の座談会……………	三三八

座談会の後——『文学界』の政治と文学一瞥……………	六〇
日本はどうなるか——房雄の黄痘病……………	六〇
三木清的不安の正体——観念弄戯の一例……………	六〇
禪問答的座談会——リアリズム検討……………	六一
朔太郎に喝を入れる——詩は俳句に非ず……………	六一
文章と時代——谷崎潤一郎に註文する……………	六一
梶井の手紙争議——梶井の人物と舟橋・淀野の経緯……………	六四
時評家の悲鳴——それでは何を言はうとするのか……………	六五
斥候六人の報告——純文学の敵は内か外か？……………	六六

1935——昭和十年

軍拡で戦争除去——高田博士の新発見……………	七〇
文士と日常経済——秋江の「愚痴物語」に学べ……………	七一
思想のデパート——現実と生活からの真実……………	七二
偶然か必然か——危機に立つてる横光利一……………	七三
通俗の固定観念——中島健蔵の長篇小説論……………	七三
諷刺の貧困——伏字問題は何処へ行く？……………	七五
現実主義今何処——徒にジャーナリズムを難するな……………	七六
文学の統一戦線——ドイツの話と日本の話……………	七七
月評軽蔑「反対」——中島の講義振りに就て……………	七七
反合理文学——アナキスチックな風潮旺ん……………	七九
芭蕉の葉違ひ——念のため申し入れおき候……………	七九

ああ、転換時代——罪は誰にもない！……………	八〇
「文芸賞」の経緯——会員は態度をハッキリせよ……………	八一
官僚臭と芸術——犀星もし文芸賞を蹴らば……………	八二
叛逆の精神——問題はその実践方法……………	八二
文学者の団結——強固な単位から出発しろ……………	八三
青春叛逆せよ——小林秀雄の新人論……………	八四
死後の幸不幸——梶井・芥川・富沢・嘉村その他……………	八五
三人三態の考察——行動主義者の今後……………	八六
弱腰の暴露——十月の同人雑誌……………	八六
懇話会の雑誌——問題の発生を憂ふ……………	八七
けふ廿三周忌——漱石先生思い出拾遺……………	八八
独逸作家の例——追放作家たる覚悟……………	八九
横光との問答——忠実なる訪問記……………	九〇

1936

昭和十一年

年頭に際して——何とかなしい文学……………	九二
座談会の小火——文学者の正直さ……………	九二
選挙と文学者——時相からの退嬰……………	九三
神様の神様評——氏子ゆえの憂慮……………	九四
きびしくなる——落首文学の対策……………	九五
二つの恋愛論——宇野と岡の場合……………	九五
単行本に移るか——文芸雑誌の経営困難……………	九六

サムライの範——あつばれ荷風先生	七
でくの棒同然——作家と漢字廃止論	九
小説の混乱——新しき物の母体	九
なにかが純粹か——文士の洋行から	九
舟橋の俗物性——似非ヒューマニズム	一〇
「詩」の座談会——萩原朔太郎の場合	一〇
小説の面白さ——作家の生き方に因る	一〇
青年新進の愚痴——作家身の上相談所	一〇
文芸家と検閲——政治的手腕を振へ	一〇
詩人の無気力——無敵菊池の放談	一〇
文壇と流行言葉——人を釣る美辞麗句	一〇
遊ぶ浪漫主義——新しい美学の問題	一〇
年寄りの冷水——「青年論」是々非々	一〇
妥協と非妥協——作家的抵抗の限界	一〇
文士と電話——執筆のビジネス化	一〇

1937——昭和十二年

政治と文学と——ヒューマニズムの発展	一一
『文学界』の正体——国粹的な政治・哲学	一一
健康か不健康か——文学論のない文壇	一一
民族主義者へ——過去に取憑かれるな	一一
稀薄な指導方針——ペン倶楽部の「報告」	一一

インテリの問題——その現状と自己検討	二五
些々たる人事——私の『文学界』入り	二六
文化の大衆化——文学の独り旅は不可	二七
保田と進歩派——生活の現実から説け	二八
私小説の行方——尾崎の『暢気眼鏡』を読む	二八
高見順の啖呵——作家と批評家の「背馳」	二九
文化批判の縮図——『三田新聞』の学生調査	三〇
『再建』の発禁——出版者にも一半の責任	三三
『雪国』と『人生劇場』——本年度の懇話会賞決定	三三
個性の匂ひ——『溷東綺譚』と戯作者性	三三
不可解な進退——長谷川如是閑に与ふ	三三
時局と文学者——戦争小説などは甘い	三四
事変と文学——好色小説流行の兆	三五
先づ人間的——時局と文学者の態度	三六
綜合誌の無力——文学評論の受難時代	三七
透谷と透谷賞——慨嘆すべき出来事	三八
事変物の随一——郭沫若の日本逃亡記	三八
日本語の問題——『綴方教室』と言葉	三九
編輯出版の自由——自主的団体をつくれ	四〇
全文化人の義務——外画禁止に抗議せよ	四一
「天」の問題——保田与重郎へ頼み	四三

金持喧嘩せよ——休戦喇叭は一切無用	三三
何処へ行く?——事変下文芸誌の行方	三四
文学と人間性——政論的雰囲気を去れ	三五
文学観の対峙——荷風・白鳥・和郎の間	三六
佗し過ぎる——時は遂に失はれた	三七
編輯者の常識——『中公』問題の暗示	三八
生産者の文学——ナンセンスな合言葉	三九
批評の新分野——新著批判を清算せよ	四〇
国家的に不利——マルクス本の絶版	四一
すべて未解決——廿世紀のペンミズム	四二
都会文学没落——インテリの敗北か	四三
紙は無くなる——滅頁と文学者気質	四四
人間像の問題——瑞々しい人物を描け	四五
漢口攻略後——文学態勢はどうなる	四六
従軍作家通信——群衆心理を警戒せよ	四七
『厚物咲』が第一——外人の見た芥川賞	四八
『源氏』の完成——古典の現代語訳要望	四九
憎まれ口一つ——白鳥よ、作品も書け	五〇
政治への媚態——島木健作氏へ一言	五一
集団と合言葉——日本主義者の文章	五二

芥川・直木賞——戒しめて置きたい事……………	一五二
有用か無用か——肩書付き文学氾濫……………	一五三
正義感と制作欲——芸術性に就ての反省……………	一五三
素人の文章——礼讃は自己の貧しさ……………	一五四
「情痴」の意味——作家はどう受取るか……………	一五五
文学は芸道か——これも情痴の一種……………	一五六
諷刺は役立つか——老人と生活者の世界……………	一五七
五月人形的文章——永遠々大の美辞麗句……………	一五七
尻尾ある小説——人生に尻尾はない筈……………	一五八
検閲の批評代行——『新潮』の要望を戒む……………	一五九
呆れた戦車長——文学者自らへの悔辱……………	一六〇
困った丁野君——「呆れた戦車長」より……………	一六〇
承服しがたし——再び戦車長殿に答ふ……………	一六一
晦渋なる表現——内部は概ね空っぽか……………	一六一
好評の二書——批評家も事大主義……………	一六二
ナチスを倒せ——ヴァレリーの放送……………	一六三
散文精神是非——飛躍力喪失の危険……………	一六四
質問の自由——黒見氏に答へる……………	一六五
紙饑饉来る！——文芸家協会奮起せよ……………	一六六
旧文壇の崩壊——小説の素人と文人……………	一六七
日本人の小説——人間修業と小説修業……………	一六八

説教の悲劇	花形作家論 1・島木健作	一七〇
三十で神童	花形作家論 2・石川達三	一七〇
謙虚な傲慢	花形作家論 3・丹羽文雄	一七一
室咲き知性	花形作家論 4・阿部知二	一七二
「芸」は身を	花形作家論 5・高見順	一七三
古風な感傷	文芸批評家論 1・青野季吉	一七四
お寒い裸身	文芸批評家論 2・本多顕彰	一七五
擱んだ責任	文芸批評家論 3・小林秀雄	一七五
人柄だけ?	文芸批評家論 4・河上徹太郎	一七六
正確で低調	文芸批評家論 5・窪川鶴次郎	一七七
奇怪な魔術	年輩作家論 1・宇野浩二	一七八
人生第一幕	年輩作家論 2・里見 弴	一七九
正体見たり	年輩作家論 3・室生犀星	一八〇
迷へる羊	年輩作家論 4・坪田譲治	一八〇
怠慢な精神	年輩作家論 5・広津和郎	一八一
割り切れん	年輩作家論 6・佐藤春夫	一八二
生きてる批評	辿り着いた一段階	一八三
実質が問題	文芸社行会へ一言	一八四
どう踏切る	新進作家論 1・壺井 栄	一八五
脱皮の季節	新進作家論 2・北原武夫	一八五
弱味の露出	新進作家論 3・石上玄一郎	一八六

「型」と取組む——新進作家論 4・太宰 治	一八七
危い若年寄——苦節十年作家論 1・尾崎一雄	一八八
猫の活力で——苦節十年作家論 2・伊藤永之介	一八八
嶮岨な峠へ——苦節十年作家論 3・和田 伝	一八九
逞しい受験生——苦節十年作家論 4・中山義秀	一九〇
素足の魅力——女流作家論 1・窪川稲子	一九一
崇る無邪気——女流作家論 2・大田洋子	一九二
器用貧乏禍——女流作家論 3・小山いと子	一九三
動脈の運命——女流作家論 4・宮本百合子	一九三
困つた偽悪——女流作家論 5・森三千代	一九四
銀笛を擲つ——女流作家論 6・中里恒子	一九五
尽きぬ生命——女流作家論 7・宇野千代	一九六
羽搏け野性——現代詩人論 1・高村光太郎	一九七
古風への逆行——現代詩人論 2・北川冬彦	一九八
未来の放棄——現代詩人論 3・三好達治	一九九
脆弱な抒情——現代詩人論 4・神保光太郎	二〇〇
後退を許さず——現代詩人論 5・小野十三郎	二〇〇
枉げぬ信条——現代詩人論 6・萩原朔太郎	二〇一
菊池寛に与ふ——芥川賞辞退と面子	二〇一
怖る可き変節——翻訳・紹介者の任務	二〇三
錯覚的論理——中堅作家論 1・横光利一	二〇四
非情の人——中堅作家論 2・川端康成	二〇五

生活の責任——中堅作家論3・徳永直	三〇六
涙脆い硬派——中堅作家論4・武田麟太郎	三〇七
自意識過多——中堅作家論5・中野重治	三〇八
韜晦の風格——中堅作家論6・井伏鱒二	三〇九
今後の興味——中堅作家論7・尾崎士郎	三一〇
求道者気質——現代大家論1・島崎藤村	三一一
跋行的浪漫派——現代大家論2・正宗白鳥	三一二
澄明への憧憬——現代大家論3・永井荷風	三一三
耽る『源氏』——現代大家論4・谷崎潤一郎	三一四
無道無門居士——現代大家論5・武者小路実篤	三一五
瑣末は瑣末——現代大家論6・徳田秋声	三二六
能楽の至境——現代大家論7・志賀直哉	三二七

1941——昭和十六年

ジョイスを偲ぶ	三三〇
詩人協会に就て——群衆心理を排撃す	三三〇
文化部へ進言——閉された扉を開け	三三一
詩人の誇り——「退屈な忠告」に応ふ	三三二
古典を護れ——教科書改竄を憂ふ	三三三
「国民」といふ語——乱用は本質的誤謬	三三四
「黒表」から「白表へ」——陋劣なデマを排す	三三五
作家の自己逃避——我身に鋭いメスを	三三六